

---

# 砂時計と樹と

森樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
砂時計と樹と

【コード】  
N5995P

【作者名】  
森樹

【あらすじ】  
これは地球とは外れた別世界での話。  
少女と少年の出会い。  
少女の記憶がだんだん鮮明に呼び戻されていく。

## 樹の下で（前書き）

前作放置で書き始めてしまいましたすみません<>  
sssdですが、どうぞ！

## 樹の下で

これはこの地球とは外れたどこかにある世界での、ある少女の話。少女はその世界に独りだけだった。周りには誰もいない。彼女は独りに慣れていった。

誰もいなくても、彼女はそれなりに、それなりの普通の日々を過ごしていた。

彼女には記憶がない。自分の名前も、家族も、自分が元々どんな人間だったかさえも分からない。

いや、自分が人間なのかどうかも分からない。

そんな少女には宝物が二つあった。

一つはその世界に大きくそびえたつ樹。

春になっても、夏になっても、秋になっても、冬になっても、その樹はいつでも青々とした葉を茂らせていた。

彼女はその樹の下でお昼寝をするのが大好きなのだ。

もう一つは、誰かから貰ったのか、それとも自分がずっと持っていたのか…それさえも分からない、だがずっと肌身離さず持っていた砂時計だ。

その砂時計の中に入っている砂は、どこにでもある普通の砂に見えるのだが、なにか違っていった。

陽の光を浴びている訳でもないのに、自ら淡い光を発しているのだ。その光を見ているだけで、少女の心は自然と落ち着いて、優しい気持ちになれるのだという。

この二つの宝物があるおかげで、彼女は普通の日々を過ごしていけるのだ。

ある日のことだった。  
いつも通り、少女が樹の下で砂時計を隣にうつうつとしているときだった。

「こんにちは。」

少女は驚いた。今までずっと独りきりだったこの世界に突然人が現れたのだ。

「お隣、邪魔してもいいかな。」

突然現れた人間 少女と同じ年くらいの少年だろうか は、  
優しく微笑み、少女の隣に座った。

その時、彼女はその少年に懐かしい感情をもった。

ただ、その時の彼女にはそれが何か、分からなかった。



樹書と樹砂（前書き）

相変わらぬggggggwwww

## 樹書と樹砂

「座らせてもらおうよ。」

少年は少女の隣に腰を下ろした。

「知らない間に此処に来ていたんだ。いったいなんなんだい、此処は？」

彼も記憶をなくしているのだろうか？そもそも自分の味方なのか？さまざまな疑問が浮かんでくる。

彼は彼女の不安を読みとったのだろうか。

「あははっ。大丈夫。僕はおかしなことはしない。ただ、話を聞きたいだけなんだ。君、名前は？」

少女は答えようとした。しかし、ずっとずっと相手もいない、この世界で独りで過ごしてきたのだ。

話し方なんてとっくに忘れてしまっていた。

少年はまた少女の気持ちを讀んだのか、微笑んで、

「話せないのかい？じゃあ紙を持っている。これに言いたいことを書いてくれ。」

その紙は少し茶色っぽく、古紙のようだった。

木のような、淡い、消えそうな、懐かしい香りがした。

『私は名前がない。記憶もないし、話すことも出来ない。自分が何故此処に来たのかも、自分の存在すら分からない。』

それを読むと少年は納得したように微笑んで、

「そうか。じゃあどうしよう…。ああ、ごめんね。僕の事を言っていなかった。僕は『樹叢』<sup>ジュライ</sup>というんだ。そう呼んでくれると嬉しいな。」

そう言った。彼は少し悩み、

「君はずっとこの樹の下で砂時計と一緒にいた…。『樹砂』<sup>ジュサ</sup>ってのはどうだい？？」

樹砂<sup>ジュサ</sup>…自分にぴったりだと少女は思った。

『ありがとう。』

そう書いた紙を彼に返す。

その時、彼の頬が赤く染まったのは気のせいだったのだろうか。

樹書と樹砂（後書き）

○○○○○○○○○○

名前には無理があつたなWWW

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5995p/>

---

砂時計と樹と

2011年1月3日23時11分発行